

村上 大樹

(文学部 哲学科 2 年次生)

私は、今回の近江八幡スタディツアーで多くの方と交流、意見交換を行い、近江八幡の町並みの中で活動する中で、ボーダレスとは何かということについて考えることが出来たと思う。その中で、障がいの有無や性別といったボーダーに限らず、世代間や国籍、伝統文化など様々なところにボーダーは存在しているという事を感じた。こうしたボーダーを取り除き、ボーダレスなまちづくりを実現するために、行政や、社会福祉協議会、民間など様々な立場の方が活動を行っている事も学んだ。ボーダレスなまちづくりに私たちが出来ることは、まちづくりへの取り組みを知ること、そして、学生の立場として、自分の専門領域での学びを活かしてボーダレスへの取り組みを考えることである。私は教育を学んでいるので、学校教育や地域学習などで、どのようにボーダレスを実現させていくことが出来るか、今回の経験を踏まえて考えていきたい。



ボーダレス・アートミュージアム NO-MA で作品を鑑賞する様子

土肥 亮太

(社会学部 現代福祉学科 2 年次生)

今回、「ボーダレスなまちとは何か」と考えてみて、大きく 2 つの意味が見出せました。

1 つ目は「文化や景観等を含めて誰からも愛されるまち」です。これを感じたのには、左義長まつり保存会の方の「外部の人の力を得る為に、外部にも情報を発信している」というお話があります。ここから「多くの人が伝統文化を愛し、守っていく為の努力をしている」という事を感じました。

2 つ目は「住民各々が、自由に生活できるまち」です。やまなみ工房の職員の方の「この人は何をしているのが楽しいのか、というのを探る事を心掛けている」という言葉が印象に残っています。このような事等から「ボーダレスなまちには、住民の自由な暮らしも必要である」と感じました。

ボーダレスなまちづくりの背景に、様々なボーダーが多様な形で絡んでいる事や住民のニーズを尊重する事の必要性を学びました。完全にボーダレスに

していくことは難しいかもしれませんが、地域等の活動に積極的に参加し、誰もが暮らしやすいまちづくりに少しずつ貢献していきたいです。



やまなみ工房の利用者が描いた電車の絵。広げるとかなりの長さとなる

早田 有希

(社会学部 現代福祉学科 2 年次生)

私は今までボーダレスについて深く考えることはなかった。今回参加して、1 番良かったと思うことは一緒に参加しているメンバーの意見を聞くことで、自分の学びにつなげることができたことである。具体的には「ボーダレスは自分の居場所があるかどうか」という意見である。この意見は自分では思いつかなかったが、すんなりと自分の中に入ってきた。ここが自分の居場所だと実感できれば、ボーダーに感じることはないと考えたからだ。私にとっての居場所は家族や学校、気の合う友達などが挙げられる。つまり、居場所といってもただ単に場所を指すのではなく、人とのつながりも関わってくるのではないかと考えた。例えば、車椅子を利用する方にとって、道がきれいに整備されておらず移動しづらい場合でも、近くに手伝う人がいればボーダーに感じることはなく、ボーダレスといえると考えたからだ。改めて学びの深いプログラムであったと感じる。



一見通りやすくなった道でも、見方を変えることが大切

妹尾 柚郁

(農学部 植物生命科学科 2 年次生)

何に関しても便利なことは良いことではあるが、ただ便利で快適にするだけではより良い町づくりとは言えないということを学んだ。子供や高齢者が使いやすいように段差を少なくし、車椅子に乗った人の為にスロープやエレベーターを整備することはもちろん大切だ。しかし、歴史的景観が長所の町において、その行き届いた便利は時にデメリットになる可能性がある。その町が何を残していきたいのか等をしっかりと把握した上で町づくりをしなくてはいけない。便利さと不便さの塩梅が重要なのだ。障がいがあるからといってバリアフリーに改装された町家に訪れても歴史を感じられないという意見もあるようだ。だれでもその地域の歴史や本来の空気感に触れられるよう、あえて昔ながらの不便を残すというのもボーダレスなのだとわたしは思う。それには周りの人のサポートが必要不可欠で、その環境をみんなで協力して整えることが町づくりに繋がるのだろう。



便利に改装されつつも町家の趣を残した宿泊施設

渡中 新太郎

(農学部 植物生命科学科 2 年次生)

この春季体験学習プログラムに参加して出会った近江八幡の人達は、左義長祭りの準備や自分達の仕事を楽しんでいるように感じた。実際に、左義長祭りの準備をされていた方は、「楽しくなければ続かない」と話されていた。ラ コリーナ近江八幡で働いている方も「働いている感覚がなく、好きなことをやっていて給料を貰えるのが正直、変な感覚がある」と話されていたのが印象的だった。この楽しさが、近江八幡の伝統や町並みが守られ、発展していく源であり、困難に直面しても乗り越えていく力であると思った。

まちづくりには楽しさが必要であるように感じる。障がい者や外国人、移住してきた人にとっては、地域の人と交流が生まれることで、ボーダレスなまちになっていくのだと思う。そのきっかけが祭りやボ

ランティアなど楽しいと思える活動や行事なのかもしれない。今回のプログラムで自分の中に新しい価値観や考え方が加わり、多くの学びを得ることができた。



左義長祭りのダシの材料は、ほとんどが穀物などの食べられるものが使われる

佐藤 瑛連菜

(短期大学部 社会福祉学科 2 年次生)

国内体験学習プログラムに参加することで、近江八幡市の町の歴史や町に関わる方の声を聴き、近江八幡市のまちづくりについて知ることができた。近江八幡市を代表する左義長祭りは多世代の方が関わる祭りであり、実際に左義長祭りの左義長のダシを製作している方に話を聞き、祭りの歴史や祭りへの思いを知った。私は祭りとは縁のない環境で育ったため、近江八幡市の町民が祭りに懸ける思いに驚いたが、若い世代に祭りを繋げていく思いは、同時に伝統的な文化を残すことに繋がることを知った。次に印象に残った体験はやまなみ工房の見学である。この法人は、障がいの重さに関係なく、それぞれの障がいや個人に必要な配慮を行い利用者を受け入れている。こうした施設が増えることで障がい者やその家族が安心して暮らすことができる。また、障がい者と共生して暮らすまちづくりができるのではないかと感じた。今回のプログラムを通して、ボーダレスなまちづくりは、様々な世代の方が生活しやすい環境を整えていくことだと感じた。



やまなみ工房の利用者さんの作品。とても大きい

新谷 朱音

(文学部 日本語日本文学科 1年次生)

まちづくりに興味があったので、体験学習プログラムに参加することにした。プログラムのテーマであるボードレスについて、はじめは深く考えていなかったが、プログラムを通して考え、終えるころには、考えが一転した。

近江八幡市は、かつて城下町や商人の町であった歴史を感じる景観が残されていた。昔ながらのまちなみを残すのと同時に、その土地に住む人が暮らせるように、どのように残して、保存するかは難しい問題である。まちづくりや地域活性に携わる団体には、それぞれが得意とする分野がある。しかし、大きなことを行おうとすると様々な団体との協力が必要になる。そのために、立場や必要とすることが異なることを理解し、心配りをして、話し合うことが大切だと教えてもらった。

個人として向き合い、心配りや対話などのちょっとしたことから、ボードレスは実現できるということである。そして、心配りや対話は、人と関わるとどんな時でも必要なことだ。



明治期の和洋折衷の建築「旧近江八幡郵便局」

木村 洸太

(理工学部 環境ソリューション工学科 1年次生)

今回のスタディツアーは自分にとってとても新鮮で刺激的な体験になりました。まず印象的だったのは街並みでした。街を歩いてみるとただ町家が並んでいるようですが、中にはお店を営んでいたりと、ミュージアムがあったりと様々な姿をもった町家がたくさん見つかりました。外見は昔ながらの町屋、しかし中は今どきのおしゃれなお店が広がっています。町家を有効活用したりリノベーションにより古きものと現代風のがうまく調和されていて町全体に一体感を感じました。また、色々な団体の方から話を聞きましたが、その全員が街を大切に思っていると感じました。そう言った気持ちがボードレスなまちづくりに大前提として必要であり、近江八幡市にある伝統的な街並みを残し続けることができている秘訣だと痛感しました。これからはそのことを頭に残しつつ、地元で街並み保存だけでなく、ボードレス

な社会のために自分にできることがないか模索し実行していこうと思います。



映画「ほんがら」鑑賞後、実際に祭に関わっておられる方と意見交換の様子

早藤 涼花

(社会学部 社会学科 1年次生)

私はこのスタディツアーに参加して、近江八幡には「地元愛」が溢れていると思った。そう思った理由は2つある。1つ目は地域の風景や人々を大切にしながら発展させようという近江八幡の人々の意識である。今も近江八幡には江戸時代に建築された建物が多く残っている。そんな街並みを残すべく、町に合ったお店を誘致したり、空き家を地域の人の憩いの場にしたりと様々な取り組みを行っている。2つ目は町の文化継承のためにボランティアがドブ川であった堀を復活させたことだ。かつて水路であった八幡堀は、高度経済成長期にドブ川になってしまった。そんな堀を一時は埋め立ててしまおうという案もでたが、「堀は埋めた瞬間から後悔が始まる」と主張しボランティアでドブさらいを行い、埋め立て案を撤回させた結果、今の美しい八幡堀がある。

効率化や機械化の波にのまれることなく、近江八幡では自分の町の特徴を生かす取り組みをしている。私も自分の町の特徴を知りたいと思った。



今も地域の人に愛される八幡堀

安原 拓真

(社会学部 社会学科 1年次生)

まちづくりの様々なあり方について勉強したいと思い、近江八幡の体験学習プログラムに参加した。近江八幡市の街の現状や取り組みについて知ること

ができた3泊4日だった。今回、参加して、普段あまり接点のない様々な年齢層や立場の方とコミュニケーションをとる機会が得られた。みなさん熱心に話してくださり、私たちの話もしっかりと受け止めてくださった。

体験学習プログラムと一緒に参加したメンバーにも刺激を貰った。毎日の振り返りの中で、見ている視点や角度、価値観の違いで、同じものを見たり聴いたりしても捉え方が異なるということを実感した。それぞれに自分のフィールドを持っており、自分にはない考え方を知ることが出来た。自ら多様な年齢や立場の方と関わる機会を作り、コミュニケーションをとる中で、自分の視野を広げていけるようにしたい。また、このプログラムを通して得たことを内に秘めておくのではなく、積極的に発信したり活動に取り組んで行きたいと思う。



株式会社まっせの田口氏との意見交換の様子

喜多 優貴

(農学部 植物生命科学科 1年次生)

近江八幡市は町家など昔ながらの建物が多く、風情ある景観が魅力的である。また、昔から続く祭がある。これらが地域市民の思いやつながりによって今も存続していることを、まちづくりにかかわる様々な団体の方から伺った。しかし、その担い手となる若者が減っている。地域活性化を計るには地元をはじめとした人と人とのつながりが大切であり、そのつながりがボーダレスなまちにつながっていくと考える。

また、スタディツアーに参加し、障がい者は介護や支援されるというだけでなく、表現者など主体的な一面もあるということに気が付いた。福祉は、マイナスを補うのではなく、一人の人間としての存在意義を高める手段となり、ボーダレスに繋がると考えた。ボーダレスとは何か、どういう状態なのかを一緒に考えるにはできない。考え続ける必要がある。一人ひとりが意見をもって行動することによって、より深まっていくものだと気づいた。



近江八幡の地域活動について語るおやじ連の方たち

熊谷 真由

(農学部 植物生命科学科 1年次生)

4日間の活動を通して感じたことは、人々の居場所を作ろうとしていることである。特に、おやじ連について説明を聞いた時に、話をしてくださった方が生き生きとしていたのが印象に残った。自分独りではなく、仲間と一緒に楽しく過ごすことによって生きがいを得ることができ、また、日常生活においても助け合いが生まれているのだと思った。祭りについては、少子高齢化によって伝統を受け継ぐ人が少なくなる中、地域や世代を越えたつながりを保っていくことの大切さを学んだ。地域の伝統を守るためにも、世代を問わずみんなが寄り集まることのできる居場所が必要であると思った。これらの居場所があることによって、住みやすい街に、そして、ボーダレスな街になっていくのだと感じた。

このプログラムに参加して学んだことを、自分たちの住んでいる地域と比較しながら、地域活性化のために生かしていきたい。



左義長祭に向けて作られるダシのねずみ

牛山 雅結

(農学部 資源生物科学科 1年次生)

2月後半に近江八幡市でボーダレスな町づくりをテーマに4日間学んだ。たくさんの意見や考察があ

り、学ぶことや考えることが多くあった。

今回のスタディツアーで特に印象に残った事柄は、地域での連携だと思う。近江八幡市では左義長祭りやほんがら松明といった地域の神事やおやじ連などの地域の人々のつながりが垣間見えた。私を含め若者は地域の人々とのつながりが希薄だと思う。近江八幡の方々の活動を通してのつながりが少しうやましく感じた。ボーダレスな町づくりは難しいと思う。何をボーダーと捉えてボーダレスにしていくなか、対象は誰か、配慮はできているかなどを考えていく必要があると思う。しかし、何をするにしても誰かの力が必要であり、人と人とが手を取り合って活動していくことがボーダレスの第一歩だと考える。



ラ コリーナ近江八幡の風景

西山 佳佑

（農学部 資源生物科学科 1 年次生）

私は、近江八幡市での活動を通して、複数のことを学んだ。まずは、出身・性別・年齢を超えて祭りに関われる機会を増やし、幅広い人に祭りを知ってもらうことが、祭りなどの伝統を継承していくための一つの重要な要素となり得るということだ。また、より良い社会を構築していくためには、年齢・性別・障がいの有無関係なく一人ひとりと対等な人間として関わっていく必要があるということである。そして SDGs の活動には、ごみの分別など私達ができることも多数あり、自分に関わるという意識を強く持つ必要があるということである。

4 日間で、様々な視点でまちづくりを学び、多数の人からの意見を吸収することができた。今回の近江八幡での学びを活かし、大学での学びに繋げ、将来、社会や地域に貢献できるような人間になりたいと考えている。そして、祭りを愛し、地域のよりどころとされている近江八幡市の方々のように自分の故郷をもっと好きになりたい。



環境に配慮した SDGs の取り組みを推進している
ラ コリーナ近江八幡